

平成22年6月28日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520314
 研究課題名（和文）日中説話文学史構築のための『法苑珠林』『夷堅志』の比較説話学的研究
 研究課題名（英文）Comparative literature research of “Fayuan zhulin” and “Yijianzhi”
 研究代表者
 三田 明弘（MITTA AKIHIRO）
 日本女子大学・人間社会学部・准教授
 研究者番号：00277865

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本と中国の説話文学史の融合を目指す研究の一環として、中国の説話文学史上、重要な位置を占めながらも、あまりに大部であるために従来はその内容が十分把握されていなかった『法苑珠林』と『夷堅志』の詳細な分析を行ったものである。『法苑珠林』は仏教百科事典として編纂された説話集であり、その全体構造を解明した。宋を代表する知識人洪邁の著作『夷堅志』については、北宋滅亡の史実が作品に大きな影響を与えていることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study is a part of the research that aims at the fusion of a narrative literary history of Japan and China. Before this research appeared, the contents were not understood enough so far though “Fayuan zhulin” and “Yijianzhi” occupied important positions in the history of the narrative literature of China. This research clarified the globular conformation of “Fayuan zhulin” as the Buddhism encyclopedia. It was clarified that the historical fact of the north Song ruin had a big influence on “Yijianzhi” again.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：各国文学・文学論

キーワード：比較文学・中国文学・日本文学・説話・志怪・中国仏教・法苑珠林・夷堅志

1. 研究開始当初の背景

(1)日中説話文学史の構築へ向けて

本来、文学史は国別にタテ割りで語られなくてはならないというルールはない。特に

「漢字」「漢文」という表記様式を共有し、明確な影響関係の確認できる中国と日本の文学の場合、その文学史はむしろ両国のそれを一つの流れとして記述した方が、より明確に各作品の成立を説明できる側面がある。

報告者はこれまで比較文学的視点から『今昔物語集』を中心に『三国伝記』『唐物語』などの日本の説話集を分析し、また、日本の説話文学の成立に最も大きな影響を与えた中国の志怪小説集『冥報記』についての論考を発表し続け、『冥報記』の最善本である尊経閣文庫本の翻刻・注釈にも参加する(『冥報記の研究』勉誠出版 2000.3)中で、マクロな視点から、日本の説話文学をその源流たる中国の志怪小説から記述し始める説話文学史の必要性を痛感していた。

(2) 日中の説話文学研究における仏教説話に対する評価

しかし、その上で問題となるのは、日本の説話文学史においては、仏教は説話文学のメインコンセプトとして記述の中心に据えられているが、中国の志怪小説史においては、仏教的背景を持つ作品は価値の低いものとして従来はあまり重視されない傾向にあったことである。近年は、薛惠琪『六朝仏教志怪小説研究』(文津出版社 1995)のような仏教志怪小説を論じた著作も出現してきているが、その数は多くはない。日中の説話文学史を融合させるためには、仏教という両国に共通する宗教文化からの中国志怪小説史の再構築、つまり中国仏教説話史を構想することから着手する必要があるためである。

(3) 『法苑珠林』『夷堅志』研究の重要性

唐代の大型仏教類書『法苑珠林』は、六朝以来の逸書の収録説話を数多く含む点から、説話・志怪の研究に活用され、『今昔物語集』をはじめとする日本の説話集との関わりが指摘されてきた(但し『今昔物語集』との直接的影響関係は今日では否定されている。)重要な作品であるが、便利な「参考書」としてのみ扱われ、その説話集としての全体像の整理は手つかずであった。

『夷堅志』は宋代志怪小説集の代表作として、仏教説話的側面だけでなく、中国の数多い志怪小説集のなかでも質量ともに『太平広記』と並び称される二大巨峰の一であり、また収録説話が宋代の中国の民俗文化・生活文化を知る上での貴重な資料を提供している点でも高く評価されているにもかかわらず、本格的な作品論が書かれていなかった。

この二作品はその重要性が十分認識されながらも、あまりに大部であるために、その全容が充分には分析されてこなかったのである。

これらの要因から、『法苑珠林』『夷堅志』の総合的な解析が、日中説話文学史構築のために速やかに着手されるべきであると考え、本計画を立案するに至った。

2. 研究の目的

(1) 『法苑珠林』の全容解明

『法苑珠林』の全容を明らかにすべく、以下の四点を解析する事を目的とした。

- ① 『法苑珠林』全百篇の全体構造
- ② 主要各篇の仏教經典の引用構造
- ③ 主要各篇感応縁の説話排列の構造
- ④ 『法苑珠林』所収説話の話型とモチーフ

(2) 『夷堅志』の全体像の解明

『夷堅志』の全容を明らかにすべく、以下の四点を解析する事を目的とした。

- ① 作者洪邁とその周辺の史実
- ② 『夷堅志』の説話と史実の関係
- ③ 『夷堅志』の説話集としての特色と意義
- ④ 『夷堅志』所収説話の話型とモチーフ

3. 研究の方法

(1) 『法苑珠林』『夷堅志』説話データベースの作成

『法苑珠林』『夷堅志』の所収説話全話を対象とするカード型データベースをコンピューターで作成し、それによって膨大な数に及ぶ説話情報の管理と分析を可能にした。

(2) 内外の周辺諸学術領域の研究成果の取り込み

『法苑珠林』『夷堅志』の解析にあたり、日本や中国の最新の歴史学・宗教学の研究成果などを取り入れた。

(3) 善本・関連資料の調査

『法苑珠林』『夷堅志』の善本や和刻本、また関連史実などの調査を、日本や中国各地の図書館・研究施設・史跡において行った。

4. 研究成果

本研究の代表的な研究成果として次の諸点をあげることが出来る。

- (1) 『法苑珠林』の全体構成の解明
 - (2) 『法苑珠林』の最重要テーマである伝統的概念と仏教的概念の融合の具体相の解析
 - (3) 『夷堅志』編者洪邁とその時代の状況の解明
 - (4) 時代状況としての靖康の変と『夷堅志』の主題上の関連の解析
- 以下にこれらの諸成果の詳細を掲げる。

(1) 『法苑珠林』の全体構成

『法苑珠林』は、その全体を、内容から大きく三部に分けることが出来る。その三部を報告者は、仏教的観点からの仏を中心とする

宇宙全体の構造を説き示す仏法部、俗世の人間の種々相を描く世俗部、そして業と死という人間の根源的運命を主題とする因果部と、それぞれ名付けた。

そして、その三部をさらに詳細に記述内容を分析してゆくと、数篇ごとに明確な主題を指摘することが出来る事が明らかになった。以下にその分析結果を掲げる。太字部分が、『法苑珠林』全百篇を報告者が分類し、名付けた上位標題である。

仏法部

大宇宙 (劫量第一・三界第二・日月第三・六道第四・千佛第五)

敬三宝 (敬佛第六・敬法第七・敬僧第八・致敬第九)

帰依階梯 (福田第十・帰信第十一・士女第十二・入道第十三・慚愧第十四・奨導第十五・説聴第十六・見解第十七・宿命第十八・至誠第十九・神異第二十・感通第二十一・住持第二十二・潛遁第二十三)

妖怪変化 (妖怪第二十四・変化第二十五・眠夢第二十六)

発願供養 (興福第二十七・攝念第二十八・発願第二十九・法服第三十・燃燈第三十一・懸幡第三十二・香華第三十三・唄讃第三十四・敬塔第三十五・伽藍第三十六・舍利第三十七・供養第三十八・受請第三十九)

世俗部

君臣 (輪王第四十・君臣第四十一・納諫第四十二)

政治 (審察第四十三・思慎第四十四・俚約第四十五・懲過第四十六・和順第四十七・誠勗第四十八)

人間関係 (忠孝第四十九・不孝第五十・報恩第五十一・背恩第五十二・善友第五十三・悪友第五十四・扱交第五十五・眷属第五十六)

賢愚 (校量第五十七・機弁第五十八・愚戇第五十九・詐偽第六十・惰慢第六十一・破邪第六十二)

社会 (富貴第六十三・貧賤第六十四・債負第六十五・諍訟第六十六・謀謗第六十七)

技能 (呪術第六十八・祭祠第六十九・占相第七十・祈雨第七十一・園果七十二・漁獵七十三)

因果部

業 (慈悲第七十四・放生第七十五・救厄第七十六・怨苦第七十七・業因第七十八・受報第七十九・罪福第八十・欲蓋第八十一・四生第八十二)

善悪 (十使第八十三・十悪第八十四・六度第八十五・懺悔第八十六・受戒第八十七・破戒第八十八・受齋第八十九・破齋第九十・賞罰第九十一・利害第九十二・酒肉第九十三)

死 (穢濁第九十四・病苦第九十五・捨身第九十六・送終第九十七・法滅第九十八)

雑録 (雑要第九十九・傳記第一百)

『法苑珠林』は、『今昔物語集』のように、数篇をまとめる上位標題が明示されているわけではない。しかし、実際には仏法と世俗という二つのカテゴリーを軸としているという点において、その根本的な構成が『今昔物語集』と非常に類似していることが明らかになった。『法苑珠林』の『今昔物語集』に対する直接的影響関係は今日では否定されているが、類聚書としての基本構造における間接的影響のあった可能性を考慮する必要がある。

(2) 伝統的概念と仏教的概念の融合

『法苑珠林』の各篇各部内の説話構成の精査を行い、『法苑珠林』が全体における仏法と世俗という二つの世界の内包とは異なる位相で、各編内においても中国固有の伝統的観念と仏教的観念の融合というテーマが共通して存在していることが明らかになった。

六道篇鬼神部はそのテーマが特に鮮明に顕れているので、以下にその分析を示す。

六道篇鬼神部の構成は、他の部と同様、冒頭に総論となる述意部、末尾に漢土の実例である感応縁を配し、その間に諸經典からの引用によって構成される各部を配している。

六道輪廻を説く六道篇には、本来は餓鬼部が設けられるべきであった。しかし、『法苑珠林』はあえてその部の名称を「餓鬼部」ではなく「鬼神部」とした。「餓鬼」では定義しきれない、中国の多種多様な鬼を包括するには「鬼神部」という名称にする必要があったのである。しかし、それは仏教教理的には問題はないか。

この部の記事構成には、鬼を有威徳鬼と無威徳鬼に分ける言説が特に多く引用されている。無威徳鬼とは餓鬼のことであり、有威徳鬼とは一見したところ人間よりも恵まれているかに見える環境にある鬼である。ただ、有威徳鬼であっても本質的にはやはり人間に劣る。

この有威徳鬼と無威徳鬼の概念を、『法苑珠林』は主に『阿毘達磨大毘婆沙論』に依りつつ導入することによって、常に飢え苦しむ醜悪な餓鬼(無威徳鬼)のみならず、中国における仏教以前からの伝統的な形象の鬼(有威徳鬼にイメージに近い)を包括する鬼神部を立項する仏典上の根拠を獲得したのである。

そして、感応縁においては、中国の鬼の説話の歴史的展開の中で餓鬼と伝統的な鬼が段階的に融合してゆく様が看取できる説話

排列になっているのである。

鬼神部の感応縁の目録と梗概は次の通りである。

感応縁

宋司馬文宣 司馬文宣の家に連続して二体の鬼が住み着いたこと。

宋長安王胡 叔父の鬼に導かれて王胡が冥途の諸山を歴訪し出家したこと。

宋広陵李旦 李旦が二度に渉り地獄を訪問し、その有様を世に伝えたこと。

宋滎陽鄭鮮之 急死した鄭鮮之の霊が善行の功德で数年延命した事を語ったこと。

唐睦仁蒨 睦仁蒨が鬼と親交を結び、死の危機を免れること。

臨川諸山鬼怪 臨川の山中の怪物のこと。

雜明俗中鬼神 鬼神に関する非仏教系の説話と言説。

鬼神部「感応縁」は、まず餓鬼と冥官の二種の鬼が連続して登場する「宋司馬文宣」説話を冒頭に置き、続いて祖霊としての鬼が人に冥界を見せて仏教への帰依を説く「宋長安王胡」説話を配した。

次に、その二話の主題を反復しながら仏教による救済を強調する「宋広陵李旦」と、同じく冒頭二話の主題を史上の人物の説話として反復する「宋滎陽鄭鮮之」を配して、仏教説話としての主題をより明確にした。ここまではすべて『冥祥記』の説話である。

そして、伝統的な冥界観と仏教的冥界観の高レベルな融合を達成し、新しい鬼神の形象を描き出した『冥報記』「唐睦仁蒨」によって感応縁の仏教説話部分は締めくくったのである。

また、鬼神に関する世俗の言説と説話を、その後に補完的に付加した。

『法苑珠林』六道篇鬼神部「感応縁」は、所収説話の主題を連鎖式につなげることによって、伝統的冥界観と仏教的冥界観という二つの冥界観及び冥官としての鬼と罪報に苦しむ餓鬼という二種類の鬼のイメージの併存から融合へという主題を、明確に表現し得たのである。

このように『法苑珠林』各篇は、説話の排列に重要な意味が付与されているのである。

(3) 『夷堅志』編者洪邁とその時代

① 洪邁とその父兄

洪邁の履歴とその生きた時代の詳細な調査を行い、その幼年時に起きた「靖康の変」が『夷堅志』の志怪小説としての特色の形成に大きく影響している事が明らかになった。

洪邁、字は景廬、号は容齋と称した。・州鄱陽(江西省上・市鄱陽県)の人である。宣和七年(一一二三)に士大夫の家に生まれ、嘉泰二年(一二〇二)に八十歳で没した。

父の洪皓は、南宋の建国後間もない建炎三年(一一二九)に金国に二皇帝の返還交渉の使者として赴き、そのまま金に十五年に渉って抑留され、紹興十三年(一一四三)によりやく帰国することを得た。金にいる間、様々な危機や執拗な任官の要求に見舞われつつも節を曲げることなく、両国の講和成立に際して帰還を果たし、「宋の蘇武」と称された。著書に金での見聞を記した『松漠紀聞』がある。

洪邁は洪皓の三男であるが、二人の兄も優秀で世に「三洪」と称された。兄弟たちは官界で活躍したのみならず、学術方面でも、長男の洪适は金石学において、次男の洪遵は古銭研究において、それぞれ大きな足跡を残した。そして洪邁は『夷堅志』と『容齋隨筆』という宋代を代表する志怪小説と隨筆を執筆した。

② 靖康の変

宋の長年の宿敵であった遼を滅ぼした金国が、宋の弱体化を見抜き、靖康元年(一一二六)と二年(一一二七)の二度にわたって、宋の首都である開封を囲み、陥落させた挙句、上皇の徽宗と皇帝の欣宗を拉致し、宋を滅亡させた「靖康の変」は、洪邁が四歳から五歳にかけての時期の出来事であった。宋はその年の内に難を逃れた康王が即位して再興されたが、以後、金が遼に取って代わって宋を苦しめることになる。

この金の圧力は洪邁の個人史にも暗い影を落としている。七歳の時に父が金に抑留され、ようやく帰ってきたのは洪邁が二一歳の時であった。その間、十六歳の時には母が亡くなっている。また、紹興三十二年(一一六二)、四十歳の時に洪邁は使者として金に赴いたが、その際に陪臣の礼を執らされ、帰国後、君命を辱めたとして弾劾された。

洪邁にとって、靖康の変が如何に無念な出来事として後年に至っても洪邁の心に大きな影を落としてかという事は、洪邁が『夷堅志』よりも直截に自己の考えを吐露している『容齋隨筆』に見ることが出来る。

「容齋續筆卷第一」の「存亡大計」は、正しい判断に基づく献策を聞き入れなかった君主の滅びた例を、三国から五代十国までの各時代から列挙した一段であるが、その最後に「わが大宋国の靖康の難において、金軍は開封を襲った際、孤軍で深く侵入し、後から来る援軍もなかった。この隙に派兵して敵の後方である燕を突くという妙計を進言する者もいた。しかし、帝は大禍の後に悔やむ事になることを覚らず、この進言を容れず、臍を噬んだ時はもう手遅れであった。まことに嘆かわしい事であった。」と嘆じている。

(4) 靖康の変と『夷堅志』の主題

①張邦昌に関する説話

「夷堅丁志」巻七所収の「秉国大夫」は、靖康の変における重要人物の一人である張邦昌に関する説話である。

「秉国大夫」（「夷堅丁志」巻七）

張邦昌は中書舍人（中書省高級官僚）として高麗に使者として赴いた際、明州で東海廟に詣でた。その夜、夢で「後日、おまえは中書侍郎（中書省次官）になるであろうが、国政の舵取りをする大臣（秉国大夫）になることは出来ぬぞ。」という神のお告げがあった。

数年後、宣和の末に、果たして張邦昌は中書侍郎に任命された。靖康元年正月九日には、籠城する中で少宰（二人の宰相のうちの一）を拜命した。人質として金の軍營に赴き、さらに金の拠点の燕山に連れて行かれた。翌年、首都開封は陥落し、張邦昌は金に脅迫されて、傀儡国である楚の皇帝として即位することになった。そして後にこの罪で誅殺された。

この説話は、その基本的な構造は予言譚である。張邦昌は『宋書』巻四七五「叛臣列伝」に立伝されており、その中の「宣和元年除尚書右丞、転左丞、遷中書侍郎。欽宗即位拜少宰。」という記述から、張邦昌が宣和年中に中書侍郎に任官し、欽宗の即位した靖康元年に少宰となったことが分かり、これは「秉国大夫」説話の記述と符合するが、『宋史』は張邦昌がさらに金との和平交渉において、姚平仲による金軍營の夜襲が朝廷の意志ではなかったと弁明し、その功績で太宰兼門下侍郎になったことも記している。

「秉国大夫」説話において、当初、張邦昌が得た神託は、常識的に考えれば出世が次官止まりであるという内容であった。しかし、実際には張邦昌は、宰相にまで登り詰め、さらには皇帝に即位した。では、託宣は当ていなかったのかと言えばそうではない。張邦昌は宰相の期間は金の人質であり、皇帝になってからは金の傀儡であった。その後、宋を再興した高宗に詫びて一旦は許されるが、国政の舵取りをすることはなく、結局は罪を免れず自殺に追い込まれて一生を終えた。神の「国政の舵取りをする大臣になることは出来ない」という言は、全てを見通した上で、天機を漏らすことなく、非常に皮肉な形で、その一生を概括していたのである。未曾有の動乱のなかで、常に宋と金の接点の中心にいた張邦昌は、スタンスとしては時代に影響を与えうる人物であった。しかし、実際には、主体的な行動を起こして、時局を左右するということが終になく、時流に流され続けた挙げ句に破滅したのである。

「秉国大夫」話は、単に神は全てを見通していたという神秘譚であるだけでなく、張邦昌という時代のキーパーソンの一人に対

する人物批評的な側面があり、実はその点にこそ、この説話の思想的奥行きと文学的価値があるのである。

②南京攻防の説話と宋の再興

「南京亀蛇」（「夷堅丁志」巻七）

靖康元年閏月、金が南進して南京を攻撃した。南京が敵に囲まれ、差し迫った状況の中で、巨大な亀が城中に出現した。その大きさは車輪ほどもあり、高さ三尺、尾が九本、甲羅は鐵のような黄色であった。甲羅の升目毎に一文字ずつ字があり、読むことが出来るのは「郭負放生、千秋万歳」の八文字で、他は何と書いてあるのか読めなかった。亀の眼光は人を射るような迫力があり、首の鱗は錢のようで、振り向く様も尋常ではなかった。留守（地方長官）の朱魯公が亀を城隍廟に置くように命じたところ、郡じゅうの人々が急いで見物に行った。朱公は亀が民衆を惑わすことを恐れて、亀に「物を食べないが、まさか水が恋しいのか。」と言い、南湖に放してやったところ、もう出てこなかった。

しかし、それに続いて、雷万春廟に、香爐の中でとぐろを巻いている赤い大蛇が現れた。何日もじっとしていて、時々鎌首をもたげた。人々は近づこうとせず、朱公が文を起草してこれを祀り、「賊がこの街を侵略しようとしているのに、どうして冥助を施すこともなく、怪物を出現させて人々を恐れさせるのですか。」と言うと、その日に蛇は死んだ。そして、攻防は半年を越えたが、南京城はついに陥落することはなかったのである。

この説話における南京とは、北宋の四つの都の一つである南京応天府のことであり、現在の河南省商丘市にあたる。

説話のテーマは、朱魯公の理にかなった訴えに対し、天の感応があり、怪異が収束し、冥助によって都市も守られたというものである。道理の力によって怪異が収まるというのは中国の怪異譚における一つの定型であり、本話もそれに準じたものであるが、靖康の変という未曾有の大事件に関わる説話として見ると、本話のもう一つのテーマが浮かび上がる。

靖康元年閏十一月末に開封は陥落し、徽宗・欽宗の二代の皇帝が金に拉致され、翌年三月に宋の滅亡が宣言された。しかし、難を逃れた欽宗の弟、康王趙構が五月に南京で即位して高宗となり、建炎元年と改元、それによって宋は再興されたのである。つまり、南京応天府が陥落しなかったことと、南宋の成立は密接に関わっているのであり、本話は南宋の建国神話としての側面を持っているのである。

その観点から、改めてこの説話を分析する

と、大亀や大蛇の出現は陰陽の調和が崩壊したことを示す凶兆であり、本来は南京応天府が陥落するはずであったことを、言外に語っているのである。しかし、朱魯公は、亀の背に書かれていたとおりに放生を行い、また大蛇が人々を怯えさせていることを堂々と天に訴えて批判した。その剛直さにより天を味方として、南京城を滅亡より救ったのである。そして、この都市に対して天の加護があったからこそ、この地に来た趙構が宋を復興させることが出来たのであるという含みも読み取り得る。

「夷堅丁志」巻七の中で、この説話の直後に、前節において分析した張邦昌説話「秉国大夫」が配列されていることは意味深い。高宗と張邦昌は、二人は靖康元年一月の金による第一次開封包圍において、ともに人質として金の軍営に入っている。その後、高宗の代わりに肅王が人質になり、高宗は宋に帰ることが出来たのであった。「南京亀蛇」「秉国大夫」の二話の連続は、読者に、金による楚の建国から南京における高宗の即位と宋の復興に至る一連の流れを想起させるものであり、この二話の南宋建国に関する歴史批評というテーマが、それによって一層明確に主張されているのである。また、蹂躪される運命を変えた都市と、予言されたとおりの破滅に向かう運命を生きた男の対比に、宋と楚の明暗を象徴させる効果をも生んでいる。

占いなど予言譚を数多く収録する『夷堅志』であるが、『夷堅志』は決して運命論を標榜するものではない。むしろ「姚時可」や「南京亀蛇」に見られるような、善行や正論による運命の転換に洪邁の意は有ったとみられる。

『夷堅志』は靖康の変を起点とする金の圧迫という時代状況と密接に関わる作品であり、洪邁の士大夫意識の濃厚に反映した作品であることが看取されるのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ①三田明弘、莊子のキャラクター学、アジア遊学、査読有、130号、2010、143-157
- ②三田明弘、『法苑珠林』における鬼神、日本女子大学紀要 人間社会学部、査読無、20号、2010、152-162
- ③三田明弘、『詠史詩』の作者胡曾とその時代、醍醐寺文化財研究所研究紀要、査読無、22号、2009、71-76
- ④三田明弘、『聊齋志異』の狐女と女鬼、アジア遊学、査読有、118号、2009、130-136
- ⑤三田明弘、『冥報記』と岑文本、日本女

子大学紀要 人間社会学部、査読無、18号、2008、157-166

- ⑥ 三田明弘、靈驗と怪異の間—『今昔物語集』と『法苑珠林』における張亮説話—、国文学研究、査読有、153・154 集合併号、2008、9-16

[学会発表] (計6件)

- ①三田明弘、キャラクターとしての莊子—賢人から神仙へ—、「キャラクター」の古典化研究会、2009年5月17日、台湾大学
- ②三田明弘、仏教説話におけるアウトロー、人間文化研究機構「アウトローを考える研究フォーラム」、2009年3月16日、人間文化研究機構
- ③三田明弘、中国の狐女と女鬼、日本女子大学・国文学研究資料館共催シンポジウム「ジェンダーと古典キャラクター」、2008年11月15日、日本女子大学
- ④三田明弘、『法苑珠林』「破邪篇第六十二」の説話構成、和漢比較文学学会 第2回特別研究発表会、2008年9月3日、台湾大学
- ⑤三田明弘、夷堅志にみる宋代の歴史人物、国文学研究資料館合同日程開催プロジェクト研究会「テキストとキャラクターの問題系」、2008年7月23日、国文学研究資料館
- ⑥ 三田明弘、日中女性説話キャラクター論—『夷堅志』を中心に—、日本研究国際學術研討會—教育・社会・語言・文學—、2008年5月24日、中国文化大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三田 明弘 (MITTA AKIHIRO)

日本女子大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：00277865

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し